

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：34419

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12877

研究課題名(和文) 反応時間測定による韓国語助詞の文法現象に関する研究：母語話者と学習者の認識検証

研究課題名(英文) Perception of a particle sequence: A study of reaction times in perception level tests of native speakers and Japanese learners of Korean

研究代表者

小島 大輝(KOJIMA, Daiki)

近畿大学・文学学部・講師

研究者番号：20712178

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、韓国語の助詞連続に関する問題を扱うものである。韓国語においては、しばしば処格助詞と主格助詞との連続が確認できる。このような助詞連続の適格性は研究者によって見解が分かれる。本研究では、韓国語の助詞連続が韓国語母語話者及び日本人学習者にどの程度許容されるかについて、実験的手法を用いて検証した。その結果、当該助詞連続は韓国語母語話者の間で高い許容度を有することが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study investigates the particle sequence in Korean. In Korean, a locative case particle and a nominative case particle can be combined, as in the case of 'ega'. The eligibility of particle sequences can be distinguished by researchers. In this study, we verified experimentally how the Korean native speakers and the Japanese learners of Korean perceive the particle sequence 'ega'. The results provide evidence that the locative-nominative particle sequence 'ega' is highly accepted among Korean native participants.

研究分野：韓国語学

キーワード：韓国語 助詞 助詞連続構成

1. 研究開始当初の背景

韓国語は日本語と同じく、助詞によって文法的関係を示したり、特殊な意味の添加を行うという特徴を持つ。例えば、同一形態の格助詞が重出する現象や本来、異なる機能を有する格助詞が交替する現象、形態的に格助詞に属する助詞同士が連続(結合)する現象等が挙げられる。

研究代表者は、上述の現象のうち、助詞同士の連続について、コーパスを用いて連続が生じるパターンを調査し、どのような助詞であれば連続が可能となるのか、その制約と連続した助詞の意味・用法について論じたが、韓国語母語話者による文法性判断は一定の傾向を示しながらも、程度にばらつきが生じた。

韓国語のいくつかの助詞の判断には、母語話者であっても「ゆれ」があり、母語話者の直観を頼った意味論的な分析や調査紙形式による文法性判断テストでは、その記述に限界があるといえる。このような無意識的な文法性判断の「ゆれ」を解決するには、母語話者の認識を客観的に明示する必要があり、相応の分析手法が要求される。

2. 研究の目的

上述の韓国語の助詞の特徴的な文法現象について、反応時間測定による実験を導入した文法性判断テストを行うことで、当該現象についての証拠性を示しながら、より精緻な文法記述を行うことを主たる目的としている。

本研究課題で用いる、反応時間測定による文法性判断の実験は、正誤を分析するだけではなく、判断に要した時間を測定することによって、その正誤判断の深さを探ることができる。すなわち、母語話者の判断の「ゆれ」を認識と程度とともに浮き彫りにできるという利点がある。

以上を踏まえ、本研究課題では、以下に示す課題に取り組んだ。

課題①

助詞連続に対する韓国語母語話者の正誤判断及び反応時間の分析

課題②

助詞連続に対する日本人韓国語学習者の認識の検証

3. 研究の方法

(1) ある課題の遂行について、ミリ秒単位の反応時間、及び、誤答率を測定できるコンピュータソフトである DMDX を用いた。実験参加者には、文が呈示されてからボタンを押すまでの時間と誤答率を測定する視覚呈示実験と、音声が出てからキーボード上のボタンを押すまでの時間と誤答率を測定する聴覚呈示実験を行った。

あらかじめキーボードに YES と NO ボタンを設定し、実験参加者には、呈示された文に対し、韓国語として許容できると思ったら YES を、許容できないと思ったら NO をできるだけ迅速かつ正確に判断してもらうよう、指示した。

助詞に限らず、言語現象の記述において文法性判断の困難さは常に問題となる。ある言語現象に対してコーパスによる計量的な調査をはじめ、研究者の任意の判断や質問紙調査を用いて母語話者の判断を仰ぐという手法は、一定の成果を上げつつも、そこに生じる「ゆれ」については記述の限界があるが、本研究課題で用いる手法では、文法性判断の困難な現象に対しても、母語話者の瞬間性まで反映させることから、質問紙調査等の限界を克服することができ、言語の実現体と話者の認識との関係を明らかにすることができた。

(2) 実験参加者は、韓国在住の韓国語母語話者 37 名と、日本語を母語とする韓国語学習者である。このうち、学習者は韓国の延世大学校附設の語学教育機関である、韓国語学堂に通い、5 級または 6 級のクラスに在籍している。

(3) 処格助詞に分類されている e と主格助詞に分類されている ga が結合した形態である ega に対する認識を検証するための刺激文を作成した。先行研究の指摘によれば、ega の先行要素が位置名詞である傾向が認められるため、wi, mit, bak 等の位置名詞を先行要素とする 24 文のほか、54 文を合わせた計 78 文を実験に用いた。24 文は、このほかに「助詞が単体であるか」、「他の助詞との連続であるか」、という点も考慮に入れ、6 文×4 グループ(ターゲットである助詞連続の ega, 正用の助詞単体, 正用の助詞連続, 誤用の助詞連続)で構成されている。

実際に用いた文の一部を示すと次の通りである。

(a) oneureun nuni waseo geureonji bakkega neomu chuwo. (今日は雪が降ったからか、外がとても寒い)

(b) bammada gaega ssaugi ttaemune bakki sikkeureowo. (毎晩、犬がケンカするので外がうるさい)

(a)はターゲットである ega 文、(b)は助詞が単体で用いられた、正用と判断すべき文である。

4. 研究成果

(1) まず、韓国語母語話者は、正用と判断すべき助詞の連続、単体の助詞、そして誤用と判断すべき助詞の連続について、すべてのグループを正しく判断している。

た。この点を踏まえた上で、ターゲットのグループである ega について述べると、他のグループに比べ、やや得点が低く出ており、許容度が落ちるが、視覚呈示実験では約7割の母語話者が許容できる助詞連続として判断していた。さらに、聴覚呈示実験では8割以上の実験参加者が、ega を自然な助詞連続として判断しており、他のグループの反応数よりは有意に低い結果が出たものの、これは決して低い数値とは言えず、視覚呈示と合わせて見ても、ega は韓国語の助詞連続としては、かなり許容度の高い形態であることが明らかになった。

また、視覚呈示よりも聴覚呈示の方が、ega に対する許容度が高かったが、この点については、ゆれのある形態であるため、書き言葉としてコンピュータ等の画面上の文字を見る、あるいは書くことよりも、話し言葉として聴く、あるいは話すことの方が実際の言語使用においても多く、話者の意識が向きにくいためではないかと考えられる。

(2) 日本語母語話者の場合、韓国語母語話者に比べれば当然低くなるが、それでも7割以上の日本語母語話者は、かなり高い水準で韓国語の助詞の正誤判断を正しく行える能力があることが確認された。ega については、半数の話者が YES 反応をしており、当該助詞連続を韓国語として許容しうるものであると認識していることを示唆する結果となった。

(3) 助詞連続 ega は、arae を除く他の位置名詞と結合した場合、高い許容度を見せた。このような結果になった理由としては、位置名詞 arae の通時的要因が関係しているのではないかと考えられるが、この点については今後、さらなる検討をしていく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① 小島大輝 (2016) 「韓国語における助詞の結合形態「e-lo」の用法と構成」(原題は韓国語), 『次世代人文社会研究』第12号, pp. 133-154, 査読あり.

[学会発表] (計 4 件)

- ① Kojima, Daiki, Nobuhiro Saito, & Yuko Yamato (2017) “The Acceptability of the Locative-Nominative Particle Sequence in Korean”, The 20th Meeting of the International Circle of Korean Linguistics, University of Helsinki, 29, June, 2017.

- ② 小島大輝・斉藤信浩・大和祐子 (2017) 「韓国語の助詞連続構成に対する許容と認識—聴覚呈示実験による韓国語母語話者と日本人上級学習者の比較—」(原題は韓国語), The 12th International Conference on Korean Language, Literature, and Culture, 同志社大学(京都府・京都市), 2017年1月9日.

- ③ 小島大輝・大和祐子・斉藤信浩 (2016) 「反応時間パラダイムを用いた韓国語の言語事象の検証について」, 朝鮮語教育学会第72回例会, 九州大学(福岡県・福岡市), 2016年12月18日.

- ④ 小島大輝 (2015) 「韓国語の助詞「e」と「lo」の結合形態について」, 日韓次世代学術フォーラム第12回国際学術大会, 高麗大学(韓国・ソウル), 2015年8月22日.

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小島 大輝 (KOJIMA, Daiki)
近畿大学・文芸学部・講師
研究者番号: 20712178

(2) 研究分担者

斉藤 信浩 (SAITO, Nobuhiro)
九州大学・留学生センター・准教授
研究者番号: 20600125

大和 祐子 (YAMATO, Yuko)

大阪大学・日本語日本文化教育センター・
准教授
研究者番号：80707448

(3) 連携研究者
なし

(4) 研究協力者
なし